

尾

も名づくる成べし、

〔倭訓栞前編三十四〕やまを 山の岑なるべし、又古事記に、山尾と見ゆ、顯昭説に、山垂下處を尾と

いふといへり、兼好集に、

うごきなく絶ぬためしときぶねなる山を河をに世を祈かな

〔類聚名物考地理十四〕尾上 をのへ

山の岑の長く岬サキのさし出たる所を尾といふ、その又上を尾上といへり、尾は獸尾の如く、長きにたとへたり、山のみにあらず、水にもいへり、水尾は水の深き所の長くあるをいふ、そこにむるしの柱をして、舟の行來のしるしとするを、標濤と書て、みをつくしといふ、又はみをぐひとも云ふ、氷尾串の意なるを、つを助字にいひ入しなり、草にも尾花は長く細く、獸尾に似たればいふなり、車の長く出たる所を、もとひのをと云ふ、鳶尾の意なり、家にも有り、みな長く出たる所をいふなり、山とのみ思ふべからず、岡岳ををかと訓も、尾所なり、かは所の古言なり、奥か、ありか、床トコの類のごとし、百人一首古説四真淵 尾上は、萬葉集に、岑峯丘ともに、をと訓り、日本紀にも、頓丘を毘陀ヒト鳥と句注あり、雷岳を、かみをかと訓せり、今の世にをかといふは、さのみ高き所をばいはねど、古へは岑も岳も、通はしてをかともいへる成べし、されど古今集、みねにもをにとよみたれば、をは峯の前なる岑を専らいふべし、故に萬葉集に、岑の字を多く此詞に用ゐたり、さてその岑の上つかたを、をのへといへば、即ちみねのあたりの事と成なり、すべていはゞ、山腰以下の高き程を、山尾といふ、その上なる所をさす故に、をのへは峯なりといふにたがはず、古事記下雄略天皇かつらき山にのぼり給ふ所に、一言主の神、同じさまにて登り給ふ事をいふ所に云く、彼時、有、其、自、所向之山尾、登山上人云々、是に此上の歌に、和賀爾ワカガニ宜能イノ煩理斯ワザリシ阿理ア袁能ヲノ波理能ハハリノ延陀ノエダと有るを、參考して知るべし、